

京都産業大学 世界問題研究所

ニュースレター 2023. 3 Vol.7

NEWS LETTER

CONTENTS

活動記録

(1) 「グローバル化にともなうミツバチの大量失踪と
外来種による生物多様性への脅威」

生命科学部 准教授 高橋 純一 2

(2) 「感性情報学：人を幸せにするための情報技術」

情報理工学部 准教授 荻野 晃大 3

研究紹介・エッセイ

世界問題研究会のこと

——自主独立の学生団体の意義——

世界問題研究所長 川合 全弘 4

【活動記録】

(1) 「グローバル化にともなうミツバチの大量失踪と外来種による生物多様性への脅威」

報告者	高橋 純一 (生命科学部 准教授)
開催場所	オンライン (Teams)
開催日時	2021年11月24日 (水) 15:00 ~ 17:00

研究会概要

世界問題研究所は2021年度第7回定例研究会をオンラインで2021年11月24日に開催した。今回の研究会には本学生命科学部准教授の高橋純一先生をお招きし、「グローバル化にともなうミツバチの大量失踪と外来種による生物多様性への脅威」と題したご報告を行っていただいた。世界問題研究所のメンバーに加え、高橋先生の授業を受講している学生の参加もあり、参加者が100名以上にも及び大規模な研究会となった。

高橋先生は、分子（行動）生態学や応用昆虫学（養蜂学）、保全遺伝学を専門とされており、基礎研究としてハチの仲間を中心とした生物種の生態や多様性を遺伝子レベルで解明する活動に取り組み、応用研究として生物保全や農業における実用技術の開発に取り組んでおられる。そのうちご報告では、基礎研究を中心として、生物多様性の損失に関する問題が取り上げられた。具体的には、生物多様性の圧倒的大半を占めている昆虫のなかで、2006年頃から世界中で大量死・大量失踪が報告されるようになったミツバチの生態が取り上げられた。そのご報告の概要は以下の通りである。

ミツバチとヒトの付き合いは1万年以上前からあると確認されており、古代エジプトの遺物などからミツバチの家畜化やハチミツの採集が紀元前から行われていたことが分かっている。さらに、大航海時代になると養蜂は世界中に広まった。日本では古くから在来種のニホンミツバチを使った伝統養蜂が細々と



高橋准教授

行われてきたが、明治期にセイヨウミツバチが導入され、セイヨウミツバチを用いる近代養蜂が主流をなすようになった。また、ミツバチは1個体が多くの花に訪花するため受粉効率が良く生態系の中で優秀なポリネーター（花粉媒介者）となるので、日本を皮切りに農作物の受粉のために利用されるようになり、農業の低労力化・コスト削減だけでなく、農作物の品質向上にもつながっている。しかし、近年ではミツバチの減少がみられ、世界の食糧生産計画の大きなリスク要因となっている。

その減少の原因について、高橋先生の研究グループは病原性微生物の影響ではないかと考え、ミツバチに寄生するダニが媒介するウイルスがミツバチの大量死を招いていることを突き止めた。また、大量死を招く感染性・致死性の高いウイルスは、世界中で普及したセイヨウミツバチが感染するウイルスと、在来種のミツバチが感染するウイルスとが、ダニの体内で出会い遺伝子交換が起きて変異型として生まれたと推定できることも明らかにした。高橋先生は他にも生物多様性に影響を与える外来種の侵入経路を遺伝子解析によって推定する研究に取り組んでおり、具体的にどのような研究例があるのかご紹介がなされた。

以上のご報告の後、質疑応答に移った。質疑応答では、ニホンミツバチを用いた養蜂による地域振興の将来性について質問が出され、高橋先生からはニホンミツバチの飼育の困難さやセイヨウミツバチとの併用・共存可能性について解説が行われた。また、途上国における社会発展と環境保全の両立可能性についても質問が出され、高橋先生からは生物多様性が確保されていて無農薬であるブラジル産のハチミツなどだと日本産の10倍以上の高価格でアメリカや中国の富裕層に購入されており両立する余地があるとの解説が行われた。

グローバル化にともなうミツバチの大量失踪と外来種による生物多様性への脅威



高橋准教授提供

【活動記録】

(2) 「感性情報学：人を幸せにするための情報技術」

報告者	荻野 晃大 (情報理工学部 准教授)
開催場所	京都産業大学 14号館 14108 セミナー室 1 + オンライン (Teams)
開催日時	2022年1月31日 (月) 15:00 ~ 17:00

研究会概要

世界問題研究所は2021年度第8回定例研究会をハイブリッド方式で2022年1月31日に開催した。今回の研究会には本学情報理工学部の荻野晃大先生をお招きし、「感性情報学：人を幸せにするための情報技術」と題したご報告を行っていただいた。

ご報告ではまず、感性情報学が「感性」をどのように把握し定義しているのかが紹介された。荻野先生によれば、感性とは「知覚により得られた対象や環境に関する情報を、各自の学習と経験に基づいて整理・統一して、印象評価や感情・態度形成をおこなう心のはたらき」として捉えることができ、知覚した情報に対する個々人の感覚器官の反応だけに規定されているのではなく、個々人がそれぞれ形成してきた評価基準にもとづいて判断される主観的な価値づけとして理解できるという。

そして、そのように理解できる感性をモデル化することで、各個人の感性に適応し幸せな状態をもたらす情報サービスやスマート製品の設計を目的とする学問となるのが感性情報学ないし感性工学になるとの解説がなされた。なお、モデル化とは、サービス（体験）やモノ（製品）の特徴（色や形など）とそれらに対する各人の生体反応（脈拍や発汗など）、そして感性（印象、興味、嗜好）との間の対応関係を工学的に解明することを意味するという。だから、感性情報学・感性工学は生理学や心理学に統計学などの成果を組み込んだ学問になり、そうした諸学の融合を経て、人が快適と感じるプ



報告中の荻野准教授

ロダクトデザインやヘルスケア、エンターテインメントの支援などに取り組んでいる。そうした話が、「午後の紅茶」のボトルデザインなどを具体例として紹介しながら、展開された。

さらに、各個人の感性をモデル化する「感性を知ること」だけでなく、各個人が感性を磨いて「感性を広げること」の支援も、テクノロジーを用いて人を幸せにする感性情報学の挑戦課題になると考えられるとの説明が行われた。そして、荻野先生自身に取り組んできた研究の事例として、「感性を知ること」に関しては、各個人の感性をモデル化して各々に適した服飾コーディネート提案する仕組みの研究が、「感性を広げること」に関しては、各個人の感性が固定的にならないようにポジティブに変化させる仕組みの研究などが、詳しく紹介された。

以上のようなご報告の後、質疑応答に移った。質疑応答では、各個人を対象とするディープデータの処理に関する質問が出され、どのような分析を行っているのか補足説明が行われた。また、「幸せ」をどのように捉えるのか、快・不快といったレベルなのか、もっと深遠なレベルの幸福感まで射程に入れるのかといった議論が、仏教哲学の知見なども参照されながら行われた。さらに、服飾コーディネートの研究から分かったこととして、モデルの適合率が高くても提案通りに購入するとは限らないといった点に関して、他の動物とは異なり単なる快・不快だけでは動かないのが人間らしさではないか、といった議論が繰り広げられた。

感性とは

知覚した情報と学習・経験に基づいた主観的な判断過程

- * 知覚した多様な情報に基づく、総合的な判断結果である。
- * 刺激への個々の感覚器官の反応だけで規定されない。
- * 多様な情報を個人ごとに持つ評価基準により判断する仕組みである。評価の仕組みは、個人の体験や学習によって形成される。
- * 感性は磨くことができる理由の一つである。

報告スライドより



【研究紹介・エッセイ】

世界問題研究会のこと ——自主独立の学生団体の意義——

世界問題研究所長 川合 全弘

1.

岩畔豪雄初代所長自身の手になると思われる、世界問題研究所の設置規定（昭和41年4月1日制定）の第十条に研究所の構成員に関する規定があり、その三に「研究生」として「学生中より志願者を募って之に充てる」と定められ、また第十三条ではその任務について「研究生は必要に応じ、分属する部課に於て上司の命を受けて調査、研究に当る」と記されている。しかしこのような規定は存在するものの、筆者が調べたかぎり、実際に研究生が存在したという記録がこれまで見当たらなかった。その理由について、筆者は、この設置規定自体が言わば岩畔所長の大風呂敷の産物であり、したがって「研究生」についての規定も、「専任所員十名」や「兼任所員若干名」などと定めた他の規定と同様に、結局は空文に終わったのではないかと臆測してきた。しかし他方で、岩畔所長が建学当初の2年間ほど講師として一般教育科目「自然科学概論」を担当し、また発足後間もない法学会で学生対象の講演（「過去・現在・未来の人間観」昭和42年6月）を行うなど、日頃から学生と接し、学生教育に熱心であったこと、および卒業生の話からは、学生の様々な求めに気さくに応じた岩畔所長の温かい人柄が窺い知れることから、筆者には「研究生」の規定が全くの空言であるとも思いにくかった。しかしそれ以上調べる手立てのないまま今日まできた。

転機が訪れたのは、令和4年6月23日である。世界問題研究会 INC（インターネットクラブ）の運営幹事を務める、本学卒業生（5期生）の木野正博氏より筆者の許に一通の電子メールが届いた。同ク

ラブは、学生時代に世界問題研究会に所属した会員 OB・OG によって組織される同窓会であり、かつて世界問題研究会が発行した機関誌『世界問題』のバックナンバーを本学図書館に寄贈するために2日前に本学を訪れた際、たまたま筆者を見かけ、電子メールでの挨拶を思い立った、とのことであった。その後、木野氏とのメールの交換を通じて、また同年10月に同クラブの懇親会が京都で開かれた折に招かれ、集まった会員 OB・OG の方々との懇談を通じて、筆者は、迂闊にして筆者がこれまでその存在を知らなかったこの世界問題研究会こそが、世界問題研究所設置規定に記された「研究生」に実質上該当するのではないかと、という確信めいた着想を得た。ここにその調査の結果を報告し、世界問題研究所史の欠落の一部を埋めたいと思う。

2.

世界問題研究会は、世界問題研究所の設置と同じ年の昭和41年に設立され、平成7年に国際事情研究会に改称の後、平成13年度まで存続した文化団体連盟構成クラブである。同会は機関誌『世界問題』を第1号（昭和43年5月）より第29号（平成13年5月）まで刊行した。各号には数篇から20篇程度の、世界情勢を論じた多彩な論文が寄せられている。筆者がすでに閲覧した第1号、2号、4号に掲載された論文はいずれも本格的なものであり、研究会の活動が熱心で活発なものであったことを窺わせる。筆者が本学に奉職した昭和58年度以降の号の目次には、筆者が知る学生の懐かしい名前も散

見する。ちなみにこれらは、世界問題研究会 INC からの寄贈によって今日——わずかの欠号を除いて——そのほとんどが図書館に収められ、閲覧することができる。

さて筆者が、この世界問題研究会こそ研究所設置規定にある「研究生」に実質上該当すると推断するのは何ゆえか、その理由を以下に列挙する。第一は、「世界問題」という会の独特の名称とその設立年とが研究所のそれと全く一致すること、これである。この一致が偶然によるものとは考えにくい。むしろ研究会は研究所と同一の岩畔構想の下に発足した、と考えるのが自然であろう。第二は顧問の存在である。同研究会の初代顧問を務めた早川鉄男教授は元陸軍主計中佐であって、元陸軍少将の岩畔所長と近い関係にあり、また続いて第二代の顧問を務めた小谷秀二郎教授は、若泉敬第二代所長と親しい法学部同僚の関係にあった。東京在住で多忙の岩畔所長や若泉所員に代わって、これら二人の教授が同研究会の顧問役を託されたのではないか。第三は、草創期に計算機センター 4 階にあった世界問題研究所施設での研究会学生の活動である。本学入試広報用の冊子『京都産業大学要覧 '68』の 23 頁に、世界問題研究所の紹介記事が掲載されており、そこ

に岩畔豪雄所長の肖像写真と並んで、研究所の所長室に隣接する図書・資料室で作業をする 3 人の若い男性のスナップ写真が掲げられている（写真 1）。この要覧が 1968（昭和 43）年度入試用であることから、写真は昭和 42 年度に撮影されたものと思われる。筆者はこの 3 人がひょっとしたら世界問題研究会の会員ではないかと考え、木野氏に確認をお願いした。木野氏が世界問題研究会 INC の諸氏に問い合わせてくださったところ、玉田節雄氏（3 期生、研究会第 3 代部長）から、写真が不鮮明なために断定できないものの、これら 3 人は当時研究会の中心メンバーであった光田博昭氏（1 期生、研究会初代部長）、福田真人氏（1 期生）、猿橋実氏（2 期生）でないかと思われる、との有益な情報が寄せられた。昨秋の INC 懇親会でも、当時研究会メンバーが研究所の図書・資料室で新聞の切り抜きや資料の整理などの作業に従事した、との回顧談が聞かれた。これらを考え合わせると、草創期に世界問題研究会が世界問題研究所の活動の一部を受け持ったことは確かである。第四に、研究会学生と岩畔所長との実際の交際である。今回木野氏は、宇山博氏（4 期生）とともに、研究会創立メンバーの一人である成田幹雄氏（1 期生）を訪ね、草創期の事情について面談



写真 1 左から福田氏、猿橋氏、光田氏と思われる。
右は岩畔所長

と電話とによって二度インタビューをしてくださった（写真2）。成田氏の談話によると、岩畔所長は学生たちに親しく接し、研究会のコンパに参加した折、席上でわざわざ靴下を脱いで、かつてマレー戦線でくるぶしに被った銃創の痕を見せてくれた。また昭和42年夏に心筋梗塞で倒れて京大病院に長期入院した岩畔所長を、研究会メンバー数人でお見舞した、とのことである。いずれも岩畔所長と研究会学生との親密な交際を物語る、興味深いエピソードである。第五に、木野氏によると、昭和44年秋に本学で日本国際政治学会が開催され、その折に世界問題研究会の会員が、学会幹事役の小谷秀二郎教授、小平修教授、花井等教授らとともに学会参加者の案内業務などを行い、また宇山氏などは学生ながら会場内で正規の学会員にまじって「しっかり聴講」していた、とのことである。このエピソードも、共に情熱をもって学問に励んだ、本学草創期の教員と学生との水平的な関係を雄弁に物語る一例であろう。

これら5つの理由から、当時世界問題研究会に集い、ときに岩畔所長やその周囲の教員と親しく交わり、『世界問題』誌上で健筆を振るった若い学生たちこそは、岩畔所長が構想し、研究所設置規定の中に書き込んだ「研究生」という概念の、生きた姿にほかならない、と思われる。

3.

ではなぜ世界問題研究会は、研究所傘下の「研究生」たるにとどまらず、自主独立の学生団体となったのか。研究会が設立され、それが文連構成クラブへと発展した経緯について、目下のところその詳細は不明である。研究会の設立趣意書や会則、活動記録などは入手できていない。したがって以下では、臆測を交えた、筆者の私見を述べることにとどめたい。

さしあたり思い浮かぶ理由は、本学草創期に叢生したであろう数多くの学生団体を統一的な規則に従って規制し、指導し、育成する、広義の教学制度上の必要である。今日、学生団体は、志学会の各種委員会、独立団、体育会所属クラブ、文化団体連盟構成クラブ、届出団体（サークル）、学生プロジェクトチームなどに分類され、それぞれに定められた規則の下で学生自身によって自主的に運営されている。世界問題研究会も、恐らく当初は研究所のイニシアチブの下に発足しつつ、やがてそのような教学制度上の必要から他の学生団体と足並みを揃えて文連構成クラブの一つへと形を整えていったのではなかろうか。

しかし次に、事柄をより本質的に大学における



写真2 左から木野氏、成田氏、宇山氏

学生課外活動の意義とそのあるべき姿という視点から眺めてみるならば、研究会が研究所傘下の「研究生」から自主独立の学生団体へと発展したことは、きわめて当然のことであったように思われる。課外活動は、予め大学が設定した教科課程の枠外において、学生自身が自主的に団体を組織し、互いに切磋琢磨しながら行う活動であり、その意義は、教科課程学修と相俟って、学生の人格の調和的な形成に資する点にある。そのような活動が極力学生自身の自主性と責任の下に行われるべきであることは論を俟たない。他方「研究生」は、あくまで研究所設置規定によって「分属する部課に於て上司の命を受けて調査、研究に当る」という任務を宛がわれた存在、言い換えれば研究所業務を遂行すべき要員である。岩畔所長によって提示された世界問題という壮大な主題に感化を受けた学生たちが、やがて自分自身で自らの世界問題を見出すとともに、研究所要員の立場から独り立ちをし、互いに協力して自分たちを自主独立の団体へと組織してゆくことは、ごく自然であり、また必要かつ有益なことでもあったのではないか。

筆者がこのようなことを思いついたのは、上述したインターネットクラブの懇親会に参加したことによる。そこに集った——全員還暦超えの——同窓生の話、姿、間柄を見聞きし、筆者が強く感じたのは、世界問題研究会での自発的な活動の体験が若い学生の人格形成にいかに大きな影響を及ぼしたか、ということである。何より卒業後 40 年も 50 年も経った後に、遠方からこのように喜々として集い合い、世界問題という共通の主題の下に自身の来し方を語り合っておられる。2 年次生の折に『世界問題』誌の第 2 号に「日本の安全とその取るべき道」と題する渾身の外交政策論を寄せた澤野勝彦氏（3 期生）は、三井銀行で要職を歴任され、また筆者に最初に声を掛けて下さった木野氏は、在学中は志学会

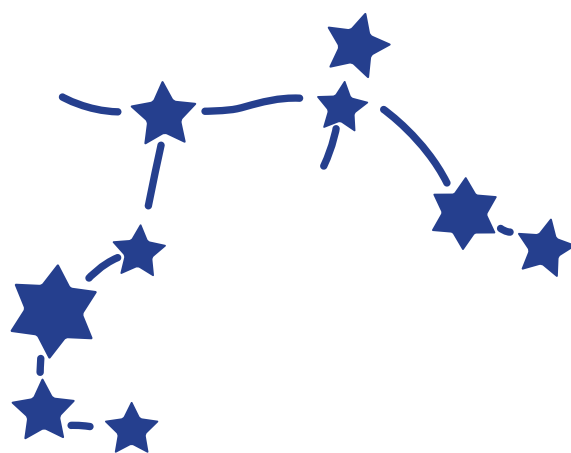
執行委員長を務め、卒業後三菱商事でエネルギー部門を担われた。国際政治学会に潜り込んで聴講した宇山氏は、後に大阪国際大学で教授として教鞭を執られた。その地位を言うのではない。研究会での活動とその後の人生の歩みとの深い内的関連に、筆者は感銘を覚えるのである。なるほど世界問題という主題は、若い学生たちにとって最初は与えられたものであったかもしれない。しかし彼らは互いに切磋琢磨しながら自ら進んでこの主題と格闘し、自身の人生の一部としてそれを人格の内に取り込んだ。京都産業大学学歌に「全人類の幸福と平和の為にわが命捧げて惜いぬ 現身の形造りに われら励まむ」という、印象深い一節がある。筆者がこの同窓会から感じ取ったものは、自主独立の学生団体が放った、そのような大志ある人格形成の熱気であった。

4.

世界問題研究会 INC との出会いは筆者に大きな収穫をもたらした。それは筆者にとって、第一に研究所設置規定に岩畔所長が書き込んだ「研究生」の語が単なる空言でなかったことを知り、研究所史の空白の一部を埋める機会となった。第二にそれは、自主独立の学生団体が有する大きな教育論的意義について考える好機となった。第三にそれは、卒業生の存在とその活躍とを通じて、大学の概念を社会大に拡幅する可能性を見出す機会となった。この有意義な出会いに感謝しつつ、この小稿を終えたい。

〈謝辞〉

本稿の執筆に際して、木野正博氏には多大のご助力に預かった。時間と労力を惜しまず、資料と情報を収集し、筆者に提供して下さった氏のご厚意に甚深の謝意を表します。



京都産業大学世界問題研究所 ニュースレター 第7号 2023年3月

発行 京都産業大学世界問題研究所 京都市北区上賀茂本山 TEL (075) 705-1468

編集 京都産業大学世界問題研究所所員 久保 秀雄／同事務局 藤本 興子

印刷 中西印刷株式会社
